

## 民族固有のことわざ＝固有諺への誘い

時田昌瑞

ことわざには異なる言語や遠い外国にも共通するものがあることが古くから知られる。そんなことから世界の共通語とさえいわれることもある。中国の古典に由来する「言うは易く行うは難し」を日本ことわざ文化学会編『世界ことわざ比較辞典』で見ると、小異の言い回しを含めれば古いラテン語からアフリカのチガ語まで25言語中15言語に及んでいる。ヨーロッパが多いものの、言語系統の異なるグルジア・トルコ・ネパール・モンゴル・ヒンディー語などにもある。さらに、比喻を異にして意味が同じようなものとなれば数えきれない程ある。たとえば「朱に交われれば赤くなる」には「犬と眠って蚤と一緒に起きる（英語）」「腐ったリンゴは他のリンゴを腐らせる（スペイン・メキシコ）」「泥棒と交われれば泥棒になり、学者と交われれば学者になる（インドネシア）」「毒山に暮らす鳥は毒になる、黄金山に暮らす鳥は黄金になる（チベット）」など51例におよぶ。このような状況から推定して特定の言語に固有なことわざというものは存在しないとの見方もされたのだった。じつは『世界ことわざ比較辞典』の編集過程でも、実際にそのような事態に直面したのであった。

そもそも『世界ことわざ比較辞典』の最初の構想は3部の構成からなるもので、その第3部を固有なことわざの部として途中まで進めたが、結果として第3部は日の目を見ずに終わってしまった。その最大の原因は、外国人が参考にできる辞典の内容にあったとみている。ひとことで辞典の編集者に固有なことわざを収載する意識がないか、希薄なためであらうと推測している。これに加えて研究者自身も同様な意識に囚われていたのではないかと考えている。

しかしながら、他方で日本のものを少し詳しく調べると外国のものとはつながらない民族固有のことわざといえるものも相当数存在することは明らか。私は今日まで40年ほどことわざに関わってきた。日本のことわざの歴史は古代は中国、近代は西欧の影響を大きく被ってきたといえる。他方、日本で生まれた伝来のものは多数あるはずなのだが、その認定は簡単ではない。特に人間の感情は民族や言語を超えたところがあるので認定は困難を極める。とはいえ、民族固有な文化や風土に関わるものであれば、固有のことわざ（＝固有諺）と認定できるのではないかと考えている。動植物でも固有種が存在するように…。

『世界ことわざ比較辞典』では、私は日本語を担当していたので、その時点で該当すると思えた100のことわざを拾い出した。その際に、私が考えた民族固有とみなす指標は、地名・歴史的な人物・民族料理・神社仏閣・伝承文化・語呂合わせ等とした。ただ、9年ほど前のことであり、発表の場も異なるものなので、本稿は当初の原稿を基にはしつつ、新たな原稿として解説を加え読み物風に少しアレンジした。以下に、主なものをジャンルに分けて紹介したい。

### <地名・固有名詞>

○火事と喧嘩は江戸の華：火事と喧嘩は江戸の街の二大名物だということ。江戸の街には百万人に住んでおり当時の世界一の人口だった。狭いところに木造家屋が密集しているためしばしば大きな火事にみまわれた。消防は48組が組織され、その華やかな活躍振

りは講談や歌舞伎の題材となるほど庶民に人気のあるものであった。また、江戸っ子は気が短いこともあって喧嘩早いといわれた。ところで大辞典には江戸の地名がでてくることわざは70を越えるほど多くある。ただ、現代人が使うことわざとなると5例くらいになる。そのなかで最もよく使われるのがこの火事と喧嘩だ。とはいえ、使われるようになるのは意外にも明治時代からと古くはない。

- 一富士二鷹三茄子：夢見として縁起のよいもののこと。一番に富士山、二番が鷹、三番に茄子だというもの。江戸中期ころから見られるものでいくつかの異説も知られる。その一つは駿河の国の名物をいうものだとする。三の茄子に続けて、四扇五煙草六座頭と続く。もう一つは、徳川家康があげた駿河の高いもの順位。一に富士、二に愛鷹山（足高山）、三に初茄子の値段というもの。江戸時代によく使われた常用ことわざのひとつだが、語句以上に視覚化された作品が多くある。有名な浮世絵師や禅僧・白隠によるものを初め、刀の鑿や小柄、伊万里焼の大皿、タンスの飾り金具、長襦袢の紋様など多岐に渡る。この内もっとも多く用いられたのが明治時代の引き札だ。縁起のよいものとして、種々の業種でこの図案が使われた。
- 東男に京女：男は粋な江戸っ子がよく、女はたおやかな京都女が良いということ。江戸中期ころからみられるものの、常用されたものではない。京女を京女郎といたり、東男を東都男としたりしたものもあったし、「京女に江戸男」ともいった。全国各地には、「南部男に津軽女」「越後女に上州男」「越前男に加賀女」「竜野女に姫路男」「讃岐男に阿波女」「筑前女に筑後男」など土地の名前を付した地域色のあるものが多い。
- 京の着倒れ大阪の食い倒れ：京都の人は着るものにぜいを尽くし、大阪の人は飲食に金をかける気風があるということ。これに「江戸の飲み倒れ」を加え、これを三都の気風とみるものもある。各地に「京の着倒れ南部の食い倒れ（青森）」「下総の食い倒れ常陸の着倒れ」「大阪の食い倒れ、堺の建て倒れ、尼崎は履いて果てる」「甲州の着倒れ信州の食い倒れ」「関東の着倒れ奥州の食い倒れ」「阿波の着倒れ伊予の食い倒れ」とある。
- 尾張名古屋は城で持つ：名古屋の街は名古屋城が象徴的な存在だということ。俗謡の一節「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名護屋は新城で持つ」に由来する。実際の用例は石橋忍月『東髪娘』明治27年に「伊勢は津で持ち名古屋は城で持つ」とあるのが早い。戦後も数例ながら用いられている。
- 口では大阪の城も建つ：口でいうだけなら何でもできるということの譬え。大阪の城は秀吉によって築かれた大阪城のこと。大阪城は天下統一を成し遂げた象徴的な存在であった。日本三名城の一つに数えられる。ことわざとしては古いものではなく、明治時代から。ただ、実際の用例は見当たらず、辞典や書籍だけの収載に止まっている。
- 江戸の敵を長崎で討つ：過去の恨みを何の関係もないところで晴らしたり、筋違いなことでも晴らしたりすること。江戸で受けた恨みを遠方の長崎で晴らすということから。戦後の用例でみると、江戸の文字が使われたことわざの中では三番目に使用例が多い。他方、使われたのは江戸後期であったものの江戸時代の使用例はわずかしかない。比較的よく使われるようになるのは明治時代からだ。

## <文化・風俗>

- 青海苔の答礼に<sup>だいだいかぐら</sup>太々神楽を打つ：少しの貰い物に過剰に返礼することの譬え。太々神楽は伊勢神宮に奉納される大規模な神楽。安価な青海苔のお礼に太々神楽の太鼓を打って聞かせることからいう。ことわざとしては江戸期に少し見られる珍しいもので、現代は忘れられている。
- 当てごとと越中褌は向こうから外れる：こちらが当てにしていることは、先方の都合で外れることが多いとの意。越中褌の由来は諸説あって定かではないものの、江戸期には用いられ明治期に全盛となった。紐がついた小幅な布で1mほどの長さがあり、体の後ろに垂れた布を前側にまわし腹の部分の紐に挟んで使う。腹側の紐に固定されていないので外れやすい。ことわざとしては使用例も稀であり、珍しい部類に入る。
- 伊勢屋稲荷に犬の糞：身の回りにありふれているものの譬え。江戸の街は伊勢屋の屋号を持つ家と稲荷を祀る祠が多く、街中をうろつく犬が落とす糞のようにあちこちにあったということ。江戸時代の随筆『守貞漫稿』に諺として紹介されているものの、実際の用例は確認できていない。
- 黒焼きにせねど小判はもっと効き：金は相手の気持ちを動かすものだということ。黒焼きはイモリの黒焼きで惚れ薬とされた。ところが、小判は黒焼き以上に効果があるというもの。同じ意味の川柳に「黒焼きにせねど小判は惚れ薬」とあり、どちらも江戸時代にあった。が、それ以降は用いられてはおらず、辞典でさえ収載しているものは稀ながら判じ物のようで面白い。密かに復活させたいと願っている。
- 小田原提灯で餅を搗く：意のままにならないことの譬え。また、老人の萎びた男根で房事を営む譬え。小田原提灯は円筒形であることから、これを餅つきの杵に見立てたもの。この提灯の胴の部分は携帯に便利のように不用時はたたみ、使う時は引き伸ばして使う。伸びた形状の提灯が萎びた男根のように見えることからいう。これを絵にしたものが幕末から明治期に活躍した河鍋暁斎の『狂斎百図』にある。なお、このことわざの一般的な表記は「提灯で餅を搗く」なのだが、他の絵にも使われた提灯がどれも小田原提灯であることから、ことわざの意を分り易くするために補足した。

### <歴史的な人物>

- 弘法にも筆の誤り：どんな名人にも過ちはあるものだとの譬え。弘法は弘法大師空海のこと。能筆で知られ三筆のひとり。平安時代の『今昔物語』には空海の筆の誤りを伝えるエピソードがある。大内裏の応天門の扁額を書いて掲げられた時、應（応）の字に点が無いのに気付く、額に筆を投げて点をつけたというものだ。ことわざとしては江戸中期から見られるものの、意外にも常用（註1）のレベルには達していない。現代の使用度ランキング（註2）では600番にも入っていない。なお、弘法が使われる「弘法筆を選ばず」は明治になってみられるもので、使用度合もさらに下がる。
- あかん弁慶その手は義経：いけないよ、その手はよしな、との意の洒落ことば。「よしな」という禁止のことばに類似した義経の音を掛け、その上、義経に関係する弁慶を配置したもの。大変珍しいもので江戸時代の人情本『娘消息』（二編上の巻）にあるものの、大型のことわざ辞典にも載っていないきわめつきの珍諺。なお、ここのような洒落言葉には「幽霊の手打ちで死骸がない（し甲斐がないに掛ける）」「医者に股引きはこんがよい

- (「紺」と「来ん」を掛ける)」「焼けた稲荷でとりえがない(鳥居と取り柄を掛ける)」「犬と猫の喧嘩でにやわん(似合わない意を鳴き声「にや、わん」に掛ける)」等がある。
- 朝比奈と首引き：とうてい敵わないということ。朝比奈は鎌倉時代の武将・朝比奈三郎のことで剛勇で知られた。首引きは二人の人が首に縄をかけて引き合う力比べの遊び。現代の力比べは腕相撲が普通だが、江戸時代くらいまでは首引きであった。かの鳥獣戯画にも首引きの図がある。なお、このことわざは、文の用例はきわめて少ないものの、なぜか絵画の作品が多くあり、とりわけ絵馬には大型で立派な作品があって、目立った特長になっている。
- 敵は本能寺にあり：本当の狙いは別にあるということ。真の目的を隠して人を欺く事の譬え。明智光秀が本能寺で織田信長を討ったことに由来する。本能寺の変を伝える江戸時代の文献は2点あり、ここでは頼山陽の『日本外史』を引用する。ただし、原文は漢文なので邦文になった『邦文日本外史』(巻14 大正15年)から。「光秀、乃、馬首を左にして馳す。士卒驚き<sup>あやし</sup>異む。既に桂川を<sup>わた</sup>渉る。光秀、乃、鞭を挙げて東に指し、<sup>ようげん</sup>鬪言して曰く、『吾が敵は本能寺に在り』と。衆始めて其反を知る」。この後に信長と森蘭丸がでてきて明智勢との戦いとなる。このことわざは明治時代になってからよく使われるようになり、勝海舟や斎藤緑雨、特に大衆文学の村上浪六には十数例あり常用された。
- 板垣死すとも自由は死なず：自由民権運動は終わりににはならないということ。明治時代の自由民権運動の指導者・板垣退助が明治15年に暴漢に刺された時に叫んだと伝えられるもの。文献に見られる早いものは明治39年の風刺雑誌『滑稽新聞』112号で「往年岐阜で相原尚褰に刺された時、板垣は死んでも自由は死なぬとホザイタが、今はドーダ、自由は疾くに死んで仕舞ったに～」とある。現代も数例の用例が見られる。

### <伝説・伝承>

- 開けて悔しき玉手箱：正体がわかり、期待外れにがっかりすること。浦島太郎の伝説からいう。「開けて悔しき浦島の子」ともいう。古くは室町時代の御伽草子や謡曲にみられ、江戸期にはさまざまなジャンルで用いられていた。明治時代前では中程度の常用ことわざ(ランキングが270位の42例)であった。
- 金時の火事見舞い：酒を飲んだりして顔が真っ赤になることの譬え。金時は源頼光の四天王である坂田金時で幼名が金太郎のこと。足柄山に住み熊・鹿などを友として遊ぶ。怪力の持ち主で、大江山の鬼退治で有名。体が赤いことで知られ、ことわざはこれに基づいている。「金時が酒に酔ったよう」とも「金時の醤油焚」ともいわれる。明治期から見られ、戦後も少しばかり用いられている。
- 文福茶釜に毛が生える：正体を現すことの譬え。狸が茶釜に化けた茂林寺(群馬県館林市)の伝説に基づく。江戸中期の浄瑠璃や江戸三代辞書の一つである俚言集覧には見られるものの、文例は少ない。多いのは絵画や立体作品で、茶釜から狸の頭や尻尾が出ていることもあって滑稽味のある図柄が知られる。刀の鐔や文鎮などにもあるが、茂林寺の境内には、この石造や巨大な「狸の金玉八畳敷」の石造物などが林立していて壮観。

### <神社・仏閣、宗教>

- 蟻の熊野参り：大勢の人が蟻が行列するように途切れなく行き交うこと。「熊野参り」は和歌山県の熊野三社に参詣すること。参詣が盛んになった平安時代は天皇や上皇が頻繁に詣でていた。ことわざとしても古く室町時代からあり、江戸期でも初期の文献にも見られ、細々ではあるが、現代まで続き、わずかながら使われている。
- 出雲の神より恵比寿の紙：男女の間柄は愛情より金だということ。「出雲の神」は縁結びの神。「恵比寿の紙」は明治時代の紙幣の一種で裏側に恵比寿の顔が描かれている。神と紙が語呂合わせになっていて面白く表現している。ことわざとしては明治期から見られるものの、実際の用例は見当たらない。辞典でも小型版は載せていない。
- 伊勢に七度熊野に三度：続けて「愛宕山へは月参り」ともいう。各地で信心のお参りをすること。また、信心が深すぎることはないということ。伊勢は伊勢神宮で熊野は熊野大社。江戸中期から使われ、「蟻の熊野参り」より多く使われていた。江戸期の使用頻度数は18例で常用には少し届いていない。
- 牛に引かれて善光寺参り：偶然のきっかけや他人からの誘いによって思いがけない所に行ったり、思いもよらぬことをしたりすること。善光寺は信州の古刹。平安時代の『今昔物語』に由来譚があるように古くから知られる。幕末から明治時代は刷り物として大量に出回った。ことわざ自体は、現代はそれ程には使われていないが、お土産として郷土玩具・置物・土鈴・手拭・暖簾など種々の品物が販売され、人々に親しまれている。
- 清水の舞台から飛ぶ：思い切った決断を下すことの譬え。清水の舞台は京都の清水寺にある観音堂の舞台の事。病気の治癒や恋の成就の願掛けで、高さが12メートルある場所から下の崖に飛び降りる風習があり、これに基づくもの。「清水の舞台から後ろ飛び」とも言われた。江戸期から現代まで常用され続けている。現代のことわざ使用ランキングでは129位になる。また、画題として江戸期の浮世絵や絵本に多くの作品がみられる。
- だんだん良く鳴る法華の太鼓：日蓮宗で使われる太鼓の音のように、徐々によくなるとの意の洒落ことば。「よくなる」は「成る」と「鳴る」に掛けられている。文献で早いのが『故事ことわざ辞典』（鈴木棠三・広田栄太郎 東京堂出版 昭和31年）。使用例になると戦後からで早いものも1993年になる。じつは、これ私自身の体験。当時、テニスのサークルに属しており、その中の一人がプレー中に発した言葉だった。つまり、プレーの調子がだんだん上向きになってきたぞ、との意だ。この時初めて耳にしたので明確な意味は解らなかった。使用例は現代でも極めて珍しいし、辞典でも二三の大型版以外にはでてこない。

## <人名>

- 石部<sup>いしべ</sup>金吉<sup>きんきち</sup>金兜<sup>かなかぶと</sup>：堅ぶつな人を擬人的にいうこと。堅いものである石と金が重なって出来ている名前の上に、更に金の兜をかぶっているとのことから。ことわざの人名化は日本のことわざの特長の一つと考えられる。主なものを列記すると、○平気の平左衛門（まったく平気だということ） ○知らぬ顔の半兵衛（知らぬふりをすること） ○小言幸兵衛（何かと小言を口にする人） ○合点承知之助（承知したとの意） ○骨皮筋右衛門（痩せこけた人） ○焼けのやん八（焼けの皮の状態） ○二八月荒れ右衛門（二月と八月は荒天な日が多いことから） ○寒四郎、土用三郎（天気 of 寒暖をいう）。

## <語呂合わせ>

- 日<sup>ひ</sup>暈<sup>が</sup>雨<sup>あま</sup>傘<sup>が</sup>月<sup>つき</sup>暈<sup>が</sup>日<sup>ひ</sup>傘<sup>が</sup>：太陽に暈がかかると雨傘がいり、月に暈がかかれば日傘がいるということ。「かき」の音が4回も繰り返される上、「暈」と「傘」の同音異義語、さらに「日」と「月」の対語が巧みに配置され、リズムよく7音7音に仕立てられている。日本のことわざでは最も高度な技巧が施されたものといえよう。ただ、気象学的には日暈も月暈も天気は下り坂に向かうとみられるので、ことわざの意味とは齟齬がある。天気情報とするよりも言葉遊びとして楽しみたいものだ。
- 花の下より鼻の下：風流より実益を優先することの譬え。漢字を読めば解るのだが、耳で聞いただけとか、平仮名になると理解が難しい。「花の下」も「鼻の下」も同じ音になるので何を言っているのか解らなくなるからだ。他方、ことわざの技法の観点からすると、日本語の特色である同音異義語を巧みに使っていることが分る。あたかも謎々のように同義の「花より団子」より深みを感じる。
- 驚き桃の木山椒の木：驚いたという事を「き」の音を三回続けて語呂を重ね合せた洒落。江戸期には見られず明治期からでてくる。特に全国各地の伝承童謡に多くあることから、ここが元となっているかと推定している。現代も言葉遊びのようにして使われている。また、「梅の木、桃の木、山椒の木」とするバリエーションは戦前にはみられたものの、こちらは現代には伝承されていない。
- 語呂合わせの例はまだまだ多くあるが、紙幅の都合で割愛する。

以上、百数例の中から30例を選び紹介した。わずか30例ながら固有諺の存在は明示できたと思っている。便宜的に七つの分類に分けてみたものの、当初考えていた料理や食べ物等を入れる事が出来なかった。その意味でも、今回のものはいわば限定つきサンプルみたいなもので、今後の研究の深化が求められる。しかし、「火事と喧嘩は江戸の華」で触れたように江戸がつくことわざだけでも70にも上るし、京だって50ある。また、全国各地には天気俚諺が多くあり、その土地の名を持つ未知のことわざも少なくないはずなので、固有諺の全容に迫る道はまだまだ遠く険しい。

- 註1：常用されることわざの意。筆者によることわざ使用頻度調査より20例以上を指す。  
註2：戦後に発行された新聞・テレビ・書籍・雑誌などから、筆者が収集したことわざを使用頻度順にランキング化したもので公刊はされていない。ただ、100位までは『世界ことわざ比較辞典』の付録となって発行されている。

## プロフィール

時田昌瑞 日本ことわざ文化学会副会長。ことわざの歴史やことわざの絵画・立体作品に関心をもつ。著・監修書に『岩波ことわざ辞典』岩波書店、『図説ことわざ事典』東京書籍、『絵で楽しむ江戸のことわざ』角川ソフィア文庫、『世界ことわざ比較辞典』岩波書店、『たぶん一生使わない？ 異国のことわざ 111』イースト・プレスなどがある。